

PTAの人妻は、独身の彼の前でだけ崩れる―役 員作業の遅い夜―

子どもは実家、夜の学校に二人きり。落ち着いた色香の人妻が、年下の彼の前でだけ崩れていく大人の不倫純愛

夜更け文庫／夜野しずく

本作品はフィクションです。登場人物はすべて18歳以上の成人であり、実在の人物・団体とは一切関係ありません。

プロローグ

同じクラスの保護者は、みんな間宮詩乃まみやしのを「きちんとした、感じのいいお母さん」だと言う。

役員会でいつも一步引いて、誰よりも丁寧に頭を下げる、隙のない人妻。配布物の角まできっちり揃え、誰の子どもの名前も覚えていて、あの落ち着いた奥さん。

——その人が今、俺の腕のなかで、まるで別人みたいに息を乱している。

夜のとろみが、見慣れないホテルの一室を、隅々まで満たしていた。間接照明のほのかな橙だいだいだけが点って、厚いカーテンの向こうでは、夜の街の灯りが遠くにかすんでいる。学校でも、家でもない、どこでもない場所。ここなら、二人がしていることを、誰にも見られずに済む。そのことが、後ろめたさと同じ重さの安堵を連れてきた。

昼間の詩乃を思い浮かべる。校門の前で他のお母さんたちと立ち話をすれば、品よく微笑んで、けれど決して出すぎない。役員会の議題が紛糾しても、最後にやわらかく落としたところを示すのは、いつも彼女だった。送り迎えのとき、すれ違えば「大野さん、

おつかれさまです」と、涼やかに会釈する。誰もが「しつかりした、いいお母さんね」と口を揃える、あの完璧な佇まい。たえず

その同じ唇が、今は俺の名前だけを、溶けるように呼んでいる。

「……健司さん」

いつもはゆるくまとめである艶やかな黒髪が、今はすっかりほどけて、白い首筋や肩に幾筋も乱れて貼りついていた。切れ長の涼しげな目もとが、今は潤んで、こちらを見上げてくる。左手の薬指で、細い指輪が間接照明をにぶく弾く。その光だけが、俺たちのしていることの後ろめたさを、静かに思い出させた。

家では、夫の帰りのない夜を、ひとりで静かにやり過ごしているはずの人。子どもを寝かしつけ、誰にも甘えず、ずっと背筋を伸ばして生きてきた人。その張りつめた糸が、今この部屋でだけ、音もなくほどけていくのを、俺は知っている。

学校でも、家でも、彼女は「間宮さん」でいなければならない。けれど今、この狭いひと部屋に満ちている熱を、知る者は誰もいない。夜の街も、同じクラスの保護者たち

も、何ひとつ気づいていない。それでいい、と健司は思った。この夜は、二人だけのものだ。

それでも――俺だけが知っている。この人の、表の顔と、誰にも見せない無防備な顔を。



——ここから先は製品版でお楽しみください——